

バンコクにおける都市スラムの現状と課題

—クロントイ地区のスラムの事例から—

人見泰弘

目次

1. 過剰都市化による都市問題
2. バンコクにおける都市スラム
3. 調査の概要
4. クロントイ地区の事例
5. まとめにかえて

要約

急激に発展するバンコクで、都市スラムはどのような課題を抱えているのか。本稿は、バンコクのクロントイ地区で実施したフィールド調査に基づき、以下のような都市スラム問題について論じる。バンコクでは、1960年代の工業化以降、各地で都市スラムが形成されていった。これに対してスラム改善策が取られてきたものの、都市スラムは依然として居住権を保障されておらず、立ち退きの不安を抱えている。またスラム地区の家庭では、離婚や家庭崩壊などが目立っており、家族の生活保障が大きな問題となっている。このように都市スラムでは、住環境整備といった対策では収まりきらない課題を抱えている。

キーワード：過剰都市化、都市スラム、クロントイ地区、バンコク

1. 過剰都市化による都市問題

1985年のプラザ合意以降、タイは数多くの日系企業の進出を受けつつ、未曾有の経済発展を経験してきた。とりわけ首都バンコクは、今日、アジアでも有数のメガ・シティとなった。中心部を訪れると、高架鉄道や地下鉄が整備され、オフィスビルやホテル、ショッピングセンターといった巨大な高層ビルのそびえ立つ風景が目に入る。街中では、あちこちに欧米資本のコーヒー店やファーストフード店、コンビニエンスストアも見かけられ、欧米的なライフスタイルが浸透している様子がうかがわれる。こうした風景の示すがごとく、もはやタイは発展途上国ではなく、「中進国」に仲間入りしたと言われている [末廣 2009]。

ところで、こうした経済発展の一方で、バンコクはさまざまな都市問題を抱えている。そのひとつが、都市の貧困問題である。高層ビルや華やかなショッピングセンターが作り出すシーンとは対照的に、バンコクのあちこちには、低層の住宅が密集するスラム地区が形成されている。か

つてタイでは、農村部と都市部の経済格差が指摘されてきたものの、むしろ近年は都市内部における経済格差が目立つようになった。

バンコクの都市貧困問題に注目するとき、そこにはアジア諸国の多くが共通して経験する過剰都市化（over urbanization）という現象が背景にあると言われる [松藺（橋本）2006]。過剰都市化とは、アジアやアフリカといった発展途上国における都市化が、先進国の都市化とは異なる過程で発生することを見いだす概念だ。すなわち、先進国では、工業化が進む都市部において労働力需要が発生し、その需要を満たすために農村部の労働者が都市部へと流入した。こうした工業化の進展と、それによって引き起こされる都市と農村間の人口移動が、都市人口の拡大、すなわち都市化を生み出した。これに対して、発展途上国の都市化は、都市部で工業化が十分に進展しないままに、農村部の過剰な人口の押出しによって都市化が進んできた。このような十分に産業発展が生じていないままに進む都市化が、過剰都市化と呼ばれている。

過剰都市化という視点からは、次のような都市化の問題点が明みにされる [松藺（橋本）2006：72-73]。ひとつは、就業状況が不安定なインフォーマル経済部門の拡大という都市経済の問題であり、もうひとつは、都市スラムの形成という都市住環境の問題である。

まずは、都市経済への影響である。新たに急増する都市人口に対して、工業化が十分に進んでいない都市は、流入者にあてがうだけの十分な雇用機会を提供することができない。ゆえに過剰都市化が進むと、都市では失業や不安定就労が目立つようになる。こうして人々は、雇用の安定したフォーマル経済部門での職ではなく、不安定で雑業的な就業部門であるインフォーマル経済部門に属する職を得ていくことになる。

ところで、こうしたインフォーマル経済部門の発生は、必ずしも途上国でのみ確認される現象とは言い切れない。かつては先進国の初期の都市化でも確認できた現象である。ただし、先進国の場合は、急激に工業化が進んだために、インフォーマル経済部門の就業者がフォーマル経済部門の労働力として吸収されていった。これに対して、途上国の場合は、工業化による雇用の吸引力がそれほど大きくはなく、インフォーマル経済部門それ自体があまり減少していないとみられている。なかには、インフォーマル経済そのものが、都市経済を補完しているとみる向きもある。いずれにせよ、過剰都市化は、都市に流入して滞留する人々に十分な雇用機会を提供できないがゆえに、都市の不安定就業層を生み出すことにもなる。

もうひとつが、都市住環境への影響である。過剰都市化が進むと、都市は急激な人口流入に対して道路や交通機関、上下水道などの都市社会資本の整備を間に合わせることができず、十分な居住空間を提供することができない。そのため、住居を購入できない人々は、たとえば、湿地帯のように水はけが悪くて土地利用が進んでいない地域や、河川敷や鉄道敷、港湾付近のほか、市場やごみ収集場所の周辺といった土地条件の悪い地域に粗末な家々を立てて住み着いていくことになる。その結果、都市貧困層が暮らす都市スラムが目立つようになっていく。ここでスラムとは、物理的環境の劣悪さによって定義される居住地域のことを指す¹⁾。なかには、土地契約がないままにその地に居住するケースもあり、その後のスラム地区の撤去・移転問題へとつながっていく。

なお、こうした都市スラムは、先進国においては、経済発展にともなう住民の経済力の上昇か

ら縮小してきたと言われる。しかし、アジア諸国をみると、経済発展を遂げつつも都市スラムの解消にはつながっておらず、現在も数多くのスラム地域が残されている^{2,3)}。

こうした背景をふまえつつ、本稿では、成長が著しいバンコクの過剰都市化の問題に目を向けたい。とくにバンコク最大のスラム地区であるクロントイ（Klong Toey）地区を取り上げ、バンコクの都市スラムの現状と課題を検討する。

本稿は、以下の手順で考察を進める。まず、バンコクにおけるスラムの形成過程と都市貧困対策について確認し、スラムの住環境整備がすすめられてきたことを押さえる。これをふまえつつ、バンコク最大のスラム地区であるクロントイ地区で実施したフィールド調査のデータをもとに、今日のスラム地区が抱える問題を明らかにする。まずクロントイ地区の概要を記述し、次いで、当地で活動するプラティープ財団の事業内容を述べる。そのうえで、当地で大きな課題となっている住宅問題と家族問題に焦点をあてていきたい。

2. バンコクにおける都市スラム

2.1. 都市スラムの形成過程

タイ全土には、チェンマイなどの地方都市を含め、数多くのスラムが形成されている [秦 2005]。その多くは、首都バンコクに集中している。まずは、バンコクの都市スラムの概要を確認しよう。その歴史は、戦後タイの経済発展の過程と深く関わっている⁴⁾。

戦後の経済開発の先導的役割を期待されてきたバンコクでは、1960年代の工業化を契機として、労働力需要が高まっていた。一方で、農村部では農業開発が進められていたものの、商品経済の浸透により消費支出が増大していく。こうした消費支出を補うために、農村部の余剰労働力がバンコクへと流入することになった。

バンコクへの労働者の流入は、都市部の急速な人口拡大をもたらした。ところが、彼らが購入可能な住宅は絶対的に不足し、また雇用先も限られていた。そのため人々は、土地所有者との正式な契約がないままに、多くは線路や運河沿いにある寺院やバンコク都、公共機関が所有する公有地に住み始めた。こうしてバンコクには、あちこちに都市スラムが形成されていくことになる⁵⁾。

ここで、バンコクにおける都市スラムのマクロな変動について、統計データをもとに確認しておこう。表2-1は、バンコクにおけるスラムの全体的な推移を示している。まずスラム地区の数に注目すると、その数はとくに1970年代あたりから急増する傾向がみられ、1980年には約1000ヵ所に、2006年には1774ヵ所にまで拡大した。スラム人口の変動も同じような傾向にあり、1980年には100万人近くに増え、2006年には180万6000人となり、25年前と比べてほぼ倍増している。スラム人口がバンコクの全人口に占める比率をみても、1970年以降は20%程度であったものが、2006年には30%を超えるまでに上昇している。まさにバンコクにとって、スラム問題が深刻な社会問題となってきたことがうかがわれる。

表2-1 バンコクにおけるスラム分布状況の変化

年	スラム地区	スラム人口 (1000人)	バンコクの人口 (1000人)	スラム人口比率 (%)
1940	86	85.3		
1945	108	107.1	1178.9	9.1
1950	183	181.5		
1955	232	230.1	1733.3	13.3
1960	361	358.0	2168.7	16.5
1965	461	457.2	2896.2	15.8
1970	678	672.3	3516.8	19.1
1975	881	873.6	4349.5	20.1
1980	1000	991.7	5153.9	19.2
1985	943	956.5	5174.7	18.5
1990	981	946.8	5439.0	17.4
1996	1246	1247.2	5585.0	22.3
2006	1774	1806.4	5695.9	31.7

出所：新津 [1998] および遠藤 [2011] より作成。

次に、もう少し詳しく、地域別にバンコクのスラムの分布状況を見ておこう。表2-2は、バンコクを内区/中間区/外区とエリアごとに区分したうえで、地域別のスラム分布状況を1985年、1996年、2006年の各年において示したものである。表2-2をみると、1985年から2006年にかけて、スラム地区数が主に外区で増加している。後述するように、これは都心のスラム地区が郊外に立ち退き・移転した結果とみられる [遠藤 2011: 49]。ところが、いったん郊外に移転したとしても、郊外での就業機会が限られていたため、移転した人々は再び都心に還流する傾向がみられた。それゆえスラムの郊外化が進む一方で、都心部では人口密度が依然として高いままとまっている。表2-2が示すように、バンコクのスラム地区は都心部に集中する傾向が続いており、とりわけ内区と中間区では、平均人口も1000人を超えるなど過密状態が続いている。

表2-2 バンコクにおける地域別スラム分布状況の変化

	年	内区	中間区	外区	合計
スラム地区数	1985	406	486	51	943
	1996	422	566	258	1246
	2006	534	860	380	1774
スラム人口 (1000人)	1985	372.6	538.1	45.8	956.5
	1996	544.0	556.1	147.1	1247.2
	2006	579.6	912.2	314.6	1806.4
都区域別人口 (1000人)	1985	2933.4	1843.5	397.8	5174.7
	1996	2360.9	2301.5	922.6	5585.0
	2006	1804.7	2809.7	1081.5	5695.9
スラム地区あたりの平均人口(人)	1985	917	1107	898	1014
	1996	1289	983	570	1001
	2006	1085	1061	828	1018
スラム人口比率 (%)	1985	12.7	29.2	11.5	18.5
	1996	23.0	24.2	15.9	22.3
	2006	32.1	32.5	29.1	31.7

出所：遠藤 [2011 : 51] より作成。

2.2. 都市貧困対策の経緯

スラム地域がバンコクの都市政策の対象となってきたのは、1960年頃からである。当時のスラム政策では、スラム地区を撤去し、住民を低所得者向けの公共住宅に移動させるという撤去・移転方式 (relocation) が柱だった。しかし、スラムを撤去して公共住宅への移転を進めるこの方針には、いくつかの問題があった [新津 1998 : 271]。ひとつには、代替地を探して住宅を供給するというスラム移転に莫大な予算がかかることである。住民は移転して公共住宅に入居できたとしても、家賃などの費用を負担することができずに、結局のところ、権利を他人に譲り渡してスラムに戻ってしまう傾向がみられた。またスラムの住居とはいえ、住民が築いた財産であり、それを単純に取り壊してしまうことへの問題も指摘された。こうして撤去・移転方式では当初の目的であるスラムの減少を達成することができず、スラム対策の見直しが進められた。

1970年代になると、スラム対策は撤去・移転の方針から、スラムの自助努力を促す方針へと変わっていく。まず、1973年にはスラム対策を担う国家住宅局 (NHA: National Housing Authority) が発足する。そこでは、行政が住民に対して上下水道や排水設備、道路などの生活基盤を整備するかわりに、そのほかのサービスを住民自身が担当するというサイトアンドサービス (sites-and-service) 方式やスラム改善 (slum upgrading) プロジェクトが重視された。また1974

年には、都市貧困層向けに生活向上プログラム、インフラストラクチャー改善事業などが計画され、職業訓練などのほかに、歩行路、水道や排水路の整備、電気やごみ収集システムの構築、消火器の設置といった防火設備、保健施設の設置などが計画された。こうした対策により、スラム地区の物理的環境が、一定程度は改善されることになった。

ところで、1980年代後半になると、タイの経済発展により都市下層民の就業機会が増えるとともに、とりわけ都心部では地価上昇と都市開発の圧力の増大から、スラムの撤去や移転の圧力が高まった。そして、スラム地区の住民をバンコク郊外の公共住宅に移転する計画が打ち出されることになる。ところが、スラム住民の職業は、家の軒先に食料品や花卉といった商品を並べる露天商だったり、車やバイク、トラックで近隣に人や物を運ぶ運転手や、彼らを相手に商売をする自営業主だったりした〔遠藤 2011〕。こうした職業は、生産者と消費者が近接するスラムでこそ可能な職業であることが多く、基本的に職住近接の傾向が強い〔遠藤 2003: 49〕。それゆえに職場から離れ、交通費用がかかる場所への移転は、スラムの住民にとって困難な選択だった。その結果、一度移転した人々も、先述の通り、都心部に回帰する傾向がみられた。

またスラムには、住民が主体となって形成した組織も数多くある〔松蘭（橋本）1999, 秦 2005, 遠藤 2011〕。近年のスラム改善事業では、こうした住民組織を活用し、彼らにスラム改善の一端を担ってもらう方針が採用されている〔松蘭（橋本）1999〕。後述するドゥアン・プラティープ財団などのNGOは、こうした住民組織と連携しつつ、スラム改善事業に取り組んでいる。

これまで述べてきたように、バンコクでは戦後の経済発展の過程でスラム地区が形成されてきた。これに応じてスラム対策が採られてきたものの、その方針は撤去・移転方式からスラムの環境改善方式へと変わってきた。こうした状況をふまえつつ、現在のスラム地区はどのような課題を抱えているのか。この点を明らかにすることが、本稿のこれ以降の課題となる。以下では、バンコクで実施したフィールド調査の概要について述べた後、クロントイ地区の事例をもとに、この点について検討していこう。

3. 調査の概要

ここからは、都市スラムの現状を把握するために、2012年9月上旬にバンコクで実施したフィールド調査の結果をもとに議論したい。利用するデータには、クロントイ地区でスラム改善策に取り組むNGO、ドゥアン・プラティープ財団への聞き取り調査とともに、クロントイ地区での現地見学などから得られた内容が含まれる。

調査対象としたクロントイ地区は、バンコク最大規模のスラム地区である。その歴史も古く、都市貧困問題がさまざまな形で顕出している地域であるため、今回の調査対象に選んだ。また聞き取りを行ったプラティープ財団は、このクロントイ地区をベースに活動する団体である。財団の設立者であるプラティープ・ウンソントム・秦氏がクロントイ地区のスラムの子どもたちに教育機会を与える活動から事業をスタートした同財団は、しだいにその活動内容を拡張し、現在は

さまざまなスラム改善策に取り組んでいる。

聞き取り調査は、インタビュー内容をメモしつつ、英語で行った。使用するデータは、このときのインタビュー・メモをもとに作成したものである。聞き取りでは、クロントイ地区の概要やその形成過程、現在のクロントイ地区が抱える課題に加えて、プラティープ財団の設立経緯や財団の活動内容について尋ねた。また聞き取り調査とともにクロントイ地区を見学する機会を得られたため、そこで得られた知見についても適宜引用することにした。

4. クロントイ地区の事例

4.1. クロントイ地区の概要

まず、クロントイ地区の概要について確認しておこう⁶⁾。バンコク中心部からは東南に位置するこの地区は、チャオプラヤー川に沿うクロントイ港の港湾工事の進展とともに形成されてきた。バンコクの工業化にともなって発生する港湾工事を目当てに、農村部、とりわけタイ東北部から労働者が流入したのである。ところが、彼らは土地の高騰によって都市部に自らの土地を持つことができず、クロントイ港に隣接する運河の周辺に土地契約のないままに住み始めることになった。そして労働者の多くは、毎日のようにクロントイ港にやってきて、そこで低賃金の単純労働の仕事を得た。当時の様子をよく知るプラティープ財団のスタッフによれば、クロントイ港のゲート近くではいつも多くの労働者が集まっており、そこに斡旋人がやってきて労働者をピックアップしていく風景がよくみられたと言う。

1960年代にスラムの撤去や移転が問題となったように、クロントイ地区でも1957年頃から強制立ち退きが問題となり始め、住民と行政機関との衝突へとつながった。その後、大学機関などの調査を経て、同地区では1985年から土地分有事業が始まった。これにより土地所有者であるタイ港湾公社から20年間の借地権を得ることができ、現在は約8万人がこの地区に暮らしている。

ここで、著者のフィールドデータをもとに、現在のクロントイ地区の様子を記述しておきたい。バンコクの中心部から車で20分ほど走ると、突然低層の家々が密集するエリアに遭遇する。そこがクロントイ地区である。

クロントイ地区内には、やや広めの通りが伸びていて、その両脇には低層の家々がすきまなく立ち並んでいる（【写真1】）。通りには飲食店や雑貨店などが営業するとともに、ところどころに露天商も屋台を出している。こうした通りからは、数多くの狭い路地が幾重にも伸びており、地区全体がまるで迷路のように入り組んでいる。それぞれの路地は人が一人通れるくらいの道幅であり、二人以上がすれ違うのも難しいほどに狭いところもある。路地は、かつては湿地帯に木をかけてあるだけのものだったけれども、現在はコンクリートで舗装されている。また路地には、歩道に露出したままではあるが、水道管が引かれている。路地の両側にも家々が隙間なく密集している（【写真3】【写真4】）。家々が過剰に密集しているために日当たりもよくなく、いったん雨が降ると、路地はなかなか乾ききらない。全体的に水はけが悪い様子である。

クロントイ地区の家々をみると、壁や屋根にはさまざまな長さや大きさのベニヤ板やトタンと



【写真1】 クロントイ地区の通りの様子。道の両側には低層の家々が立ち並んでいる。住居だけではなく、飲食店や雑貨店などもみられる。



【写真2】 クロントイ地区の住居。住居は、木材や鉄板などの廃材が利用されている。



【写真3】 クロントイ地区の路地。狭い歩道の両側に、家々が密集している。路地にはごみが散乱しており、衛生状況はよくない。



【写真4】 クロントイ地区の路地。地区内の路地は狭く、内部は迷路のように入り組んでいる。

いった廃材が利用されている（【写真2】【写真3】）。ひとつひとつの家々も決して広くはない。こうした平屋の家々が、すきまなく立ち並んでいる。

地区には、全体的にごみが散乱している。ごみ袋やプラスチックゴミなどが水に浮かんだり溜まったりしており、衛生状態は決してよくはない。たとえば、【写真3】のエリアは数日前に

NGOが清掃に入った場所だったけれども、著者が訪れたときにはすでにごみが散乱していた。

またクロントイ地区で暮らす人々は、さまざまなインフォーマル経済部門の仕事に就いている。たとえば、道路沿いで花や菓子、ジュースや果物、揚げ物や麺類、ソーセージや肉の焼き物などを提供する露天商のほかに、移動手段さえあれば可能なバイクドライバーやタクシードライバーといった運輸サービス業、小さな雑貨屋や飲食店などがみられた。

今日のクロントイ地区では、迷路のように路地が広がっているだけでなく、老朽化した建物がよく目に入る。どの建物も黒ずんでいて街全体が埃っぽい印象を持つためか、バンコク中心部の華やかさとは対照的な印象を与えている。

4.2. プラティープ財団の活動

クロントイ地区では、いくつかのNGOが地区内でスラム改善活動に取り組んでいる。そのなかで最も古くから活動しているNGOのひとつが、ドゥアン・プラティープ財団である。プラティープ財団は、もともとクロントイ地区をベースに慈善活動を行っていたプラティープ・ウンソクナム・秦氏らが、スラムの子どもたちを対象に「一日一パーツ学校」と呼ばれる私塾を開いたことから始まる。プラティープ氏は、その後この土地での活動範囲を広げ、現在のプラティープ財団の基礎を築いた。

プラティープ財団は、教育推進事業、スラム地域開発事業、人材育成事業、緊急支援事業の四つの事業活動を行っている⁷⁾。それぞれの事業について、以下で手短かにふれておきたい。まず教育推進事業では、おはなしキャラバン、教育里親制度、芸術プロジェクト、ドゥアン・プラティープ幼稚園、難聴児教室がある。おはなしキャラバンは、タイの伝統文化などをふまえて、絵本の読み聞かせや人形劇などを子どもに見せるプロジェクトである。教育里親制度は、主に小学校から大学に至るまでの奨学金事業であり、スラム地域の子どもや農村部の子どもが対象となってきた。芸術プロジェクトは、絵画や工作などの芸術活動に子どもが取り組み、思考力の養成や表現力・想像力を向上させつつ、子どもの精神的安定性を育もうとする事業である。またプラティープ幼稚園は、昼間働きに出るスラムの保護者の子どもを養育する事業であり、難聴児教室は、難聴の子どもに発声や聞き取りの訓練に加えて、コミュニケーションの訓練を行う事業である。

次に、スラム地域開発事業では、クロントイ信用組合、スラム地区の幼稚園支援プロジェクト、高齢者プロジェクトがある。クロントイ信用組合は、スラム住民の経済的な貧困を念頭に、スラム住民が緊急時を含めて金銭的な問題を抱えた際に、少額での融資や低利息での融資を実施する信用組合制度である。幼稚園支援プロジェクトは、スラムの子どもの栄養失調問題をふまえて、スラム地区の幼稚園に対して教材や制服の購入を援助し、給食や栄養食を支援する事業である。高齢者プロジェクトは、タイでは高齢者福祉政策が十分に整っていないことから、スラム地区の高齢者を対象とする集会を開いて高齢者同士のコミュニケーションを促したり、健康や生活に不安を抱える高齢者に治療や生活援助を行ったりするプロジェクトである。

さらに、人材育成事業では、エイズ予防対策プロジェクト、青少年育成プロジェクト、「生き直しの学校」プロジェクトがある。エイズ予防対策プロジェクトは、タイでエイズ感染者が多数

いることから、エイズに関する予防教育や啓発活動を実施したり、感染者に対する職業援助や緊急援助などに取り組んだりする事業である。青少年育成プロジェクトは、地区内で覚せい剤などの麻薬が広がることを防ぎ、青少年の成長を見守るプロジェクトである。「生き直しの学校」プロジェクトは、ストリートチルドレンの社会的自立を目的とする事業であり、チュムボン県やカンチャナブリ県で更生施設を運営している⁸⁾。

最後に、緊急支援事業では、津波プロジェクトとクロントイ消防隊がある。津波プロジェクトは、2004年に発生したインドネシア沖地震により甚大な被害を受けたタイ南部で取り組んでいる復興事業である。クロントイ消防隊は、先述したようにクロントイ地区には木造家屋が密集しており、いったん火災が起きるとすぐに燃え広がって甚大な被害が出てしまうことから、地区の青年ボランティアとともに消防隊を結成し、消火活動や日々の消火訓練に従事するものである。

このようにプラティープ財団では、幼児から高齢者まで幅広い年齢層を対象としながら、信用組合活動などの経済活動から麻薬防止対策などの社会活動まで、幅広い事業活動を展開している。このような事業活動の幅広さは、言い換えれば、クロントイ地区ではさまざまな年齢層の人々が、広範囲にわたる生活問題に直面していることを物語っている。クロントイ地区では、プラティープ財団のようなNGOが地域住民と連携して、数多くの課題に取り組んでいるのである。

4.3. 住宅問題と家族問題

上述のように、クロントイ地区は現在もさまざまな課題を抱えている。とりわけ深刻な課題となっているのが、居住権に関わる住宅問題（Housing problems）と離婚や家庭崩壊に関わる家族問題（Family problems）である。

住宅に関わる問題としては、まず住民が法的な居住権を確保できていないことがあげられる。クロントイ地区は、一見すると整備されたスラム地区のようにもみられるが、そもそも港湾局との正式な契約のないままに形成されたスラム地区であり、現在も永住が保障されているわけではない。立ち退きの恐れを常に抱えているため、スラム住民は安心して生活設計を行うことが困難な状況にある。

こうした契約問題に加えて、クロントイ地区では居住空間も圧倒的に不足している。先述のように、クロントイ地区には子どもから高齢者まで幅広い年齢層が暮らしている。それぞれの家族では世代交代も進み、家族内の世帯員数が増加している。ところが、スラムの住居は、決して広くはない平屋がほとんどである。こうした住居では、世帯員数に見合うだけの十分な居住空間を確保できておらず、子どもの成長などに充分に対応できていない。住宅が密集するクロントイ地区では、スラム住民の居住エリアをいかに確保するかが、大きな課題となっている。

こうした住宅問題とともに、クロントイ地区では、離婚や家族崩壊といった家庭問題が深刻になっている。なかでも、スラムの子どものなかには、栄養失調になったり、または親の育児放棄によって十分に成長できなかったりするケースもみられる。また子どもが麻薬やシンナーといった薬物問題に巻き込まれることもある。こうした家族の生活保障の確保が、クロントイ地区では深刻な課題となっているのである⁹⁾。

5. まとめにかえて

バンコクは、東南アジアを代表する都市として、この数十年間で急激な経済発展を遂げてきた。ところが、そうした発展の一方で、都市部では経済的な格差が拡大し、あちこちにスラム地区が広がっている。国や自治体によるスラム対策に加えて、プラティープ財団のようなNGOがスラムの環境改善に取り組んでいるものの、スラム地区は、居住権に関わる住宅問題に加えて、離婚や家庭崩壊といった家族問題が深刻となっており、住環境整備といった対策では収まりきらない課題を抱えている。こうした課題に対応しつつ、いかにしてスラム地区の住民の生活を保障し、都市貧困問題を解決するかが問われている。

都市スラムが抱える問題は、バンコクだけではなく、アジアやラテンアメリカ、アフリカといった各地でも顕在化している。国家間のグローバルな競争が激しくなる一方で、都市貧困層を含む社会的な底辺層に対する社会保障や福祉制度が縮小しているとも言われている。こうした社会的なマイノリティの生活保障をいかに実現していくのが、現代社会に求められている。

注

- 1) 都市の貧困問題を取り上げるとき、居住環境が劣悪な住宅密集地域をスラム、不法占拠者の居住地をスクワッターと定義することがある。本稿では、居住環境の劣悪さという観点からみて、まとめてスラムと表現することにしたい。この点については、新津 [1989:41] や松園（橋本）[1999:149] なども参照されたい。
- 2) 都市スラムは、グローバルな国家間競争が激しくなるなか、アジア・アフリカ諸国、中南米諸国といった世界各地で形成されている [Davis 2006=2010]。たとえば、最近のマニラの都市スラムについては、青木 [2006] が詳しい。加えて、こうした世界的な都市スラムの成長が、近年の新自由主義的政策の広まりと市場化メカニズムの重視、それに関連してみられる公的セクターへの支出の削減などにより拡大しているという主張もある [Davis 2006=2010]。
- 3) なお、本稿では十分に論じられてはいないものの、過剰都市化を論じる際に、農村人口の流入に加えて、人口転換期に発生する、いわゆる「人口爆発」が背景にあることも指摘されている [新田目 2010]。
- 4) バンコクの都市スラムの歴史と背景については、橋本 [1989]、新津 [1998]、秦 [2005]、遠藤 [2003, 2011] などを参照。
- 5) なお、戦前のバンコクにもスラム地域が存在していたとされる。当時の主な居住者は、ベトナムなどからの移民労働者だった [新津 1998:258]。タイ人によるスラム形成が進んだのは、1960年代以降となる。
- 6) クロントイ地区の状況については、プラティープ財団のホームページ [<http://jp.dpf.or.th/>] などを参照。
- 7) プラティープ財団のホームページ [<http://jp.dpf.or.th/>] およびプラティープ財団編 [2010] などを参照。
- 8) 「生き直しの学校」プロジェクトについては、北澤 [2011] が詳しい。
- 9) タイのスラムの子どもたちの状況については、秦 [2005] などが詳しい。

謝辞

バンコクでのフィールド調査を実施するうえで、北海道大学大学院の北澤泰子さんにお世話になった。記して感謝したい。

参考文献

- 青木秀男 2006「マニラのスクオッター—動向と運動」新津晃一・吉原直樹編『シリーズ 社会学のアクチュアリティ：批判と創造9 グローバル化とアジア社会—ポストコロニアルの地平』東信堂，297-325.
- 新田目夏実 2010「アジア都市の現在—グローバル化と都市経済，コミュニティ，文化の変容」『日本都市社会学学会年報』28：53-63.
- Davis, Mike, 2006 *Planet of Slums*, Verso. (=2010 酒井隆史監訳『スラムの惑星—都市貧困のグローバル化』明石書店.)
- ドゥアン・プラティープ財団「プロジェクト紹介」(<http://jp.dpf.or.th/>最終アクセス日2012.10.27.)
- 編2010『ドゥアン・プラティープ財団30年の歩み—過去の経験から，未来を拓く』.
- 遠藤環 2003「タイにおける都市貧困政策とインフォーマルセクター論—二元論を超えて」『アジア研究』49(2)：64-85.
- 2011『地域研究叢書22 都市を生きる人々—バンコク・都市下層民のリスク対応』京都大学学術出版会.
- 北澤泰子 2011「社会的包摂としてのインフォーマル教育—生き直しの学校を事例として」『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』11：267-284.
- 新津晃一 1989「現代アジアにおけるスラム問題の所在」新津晃一編『現代アジアのスラム—発展途上国都市の研究』明石書店，13-91.
- 1998「スラムの形成過程と政策的対応」田坂敏雄編『アジアの大都市1—バンコク』日本評論社，257-278.
- 橋本祐子 1989「バンコクのスラム—安定と不安定の諸層」新津晃一編『現代アジアのスラム—発展途上国都市の研究』明石書店，183-235.
- 秦辰也 2005『タイ都市スラムの参加型まちづくり研究—こどもと住民による持続可能な居住環境改善策』明石書店.
- 松菌（橋本）祐子 1999「バンコクの都市住民組織—プロジェクト協力型から自助的開発型組織へ」幡谷則子編『発展途上国の都市住民組織—その社会開発における役割』アジア経済研究所，125-152.
- 2006「巨大都市の出現」北原淳・竹内隆夫・佐々木衛・高田洋子編『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門 実証編』文化書房博文社，69-84.
- 末廣昭 2009『タイ—中進国の模索』岩波新書.